

綱渡りのアラメ藻場

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産総合研究センター
	公開日: 2024-06-24
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 清水, 節夫
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008545

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



ー 綱渡りのアラメ藻場 ー

資源生産部 魚介類グループ 清本 節夫

壱岐のアラメ藻場

九州西岸域にはコンブ目の1種であるアラメからなる藻場が見られ、長崎県はその南限に位置します。アラメはアワビ・サザエのよい餌となりますが、近年、長崎県沿岸では減少しています。ここでは、現在でもアラメの藻場が維持されている壱岐市のアラメを紹介します。壱岐市郷ノ浦町の調査地では、アラメは秋に成熟し、成熟した葉が落ちることにより12月に葉の量が最も少なくなります。冬から新しい葉が伸び始め、数も増えるため、5月には葉の量が最も多くなります(図1)。そして、秋に成熟し再び落ちるといったような、季節変化を繰り返しています。

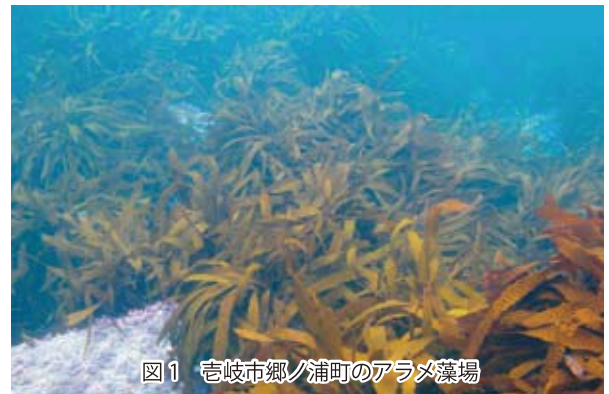


図1 壱岐市郷ノ浦町のアラメ藻場

噛み跡の犯人は？

2008年1月以降、冬になると特に浅いところのアラメで、葉に明らかな噛み跡が見られ、長さも短いものが多く見られるのに気づきました(図2)。しばらくこの噛み跡の犯人は分かりませんでした。2010年5月の潜水調査で約500尾からなるノトリスズミの大群がすぐ近くの防波堤先端で見つかりました(図3)。ノトリスズミは海藻を主な餌とする魚であり、犯人と考えられました。これほどのノトリスズミがいながら藻場が維持できるのはなぜでしょうか。そこで、噛み跡の残るアラメの葉の割合を調べたところ、秋から冬にかけて高く、春から夏までは低いことが分かりました。一方で、ノトリスズミの大群は1月から5・6月まで防波堤で見られ、それ以外の時期は確認できませんでした。藻場の近くにいる時期と噛み跡の多い時期にずれがあるのはなぜでしょうか？現在、資源生産部ではこの謎を明らかにするため、ノトリスズミに超音波発信器をつけて行動を調査中です。



図2 魚類の噛み痕が残り、短くなったアラメ

大規模な衰退と回復

2008年以降、アラメの葉の量は年々減少傾向を示していました。そして、2010年秋以降、ほぼすべてのアラメで、葉がほとんど見られない状態となっていました。その時の光景は岩の上を茎だけが覆う異様なものでした(図4)。この調査地のアラメ藻場もなくなるのかと覚悟しましたが、翌年の5月には岩は新しい芽に覆われていました。その後、2年を経過し、現在では元のアラメ藻場に戻っています。なぜ、回



図3 ノトリスズミの群れ



図4 茎のみとなったアラメ(2011年2月9日)

復できたのでしょうか。鍵は冬の低水温ではないかと考えています。2011年の冬はそれまでの10年間で2番目に低く、このため、新しい芽の生き残りがよく、回復できたのではないのでしょうか。とすると、その冬の水温がもし高かったら、この藻場は回復しなかったのかも知れません。そう考えるとこのアラメ藻場が回復したのは低水温の産物であり、高水温化すれば、すぐに消失してしまう綱渡り状態にあるのかも知れません。今後も注意深く観察を続けるとともに、アラメに大きな影響を及ぼす、ノトリスズミをはじめとする藻食魚の行動を明らかにし、魚の影響を軽減する方法を開発する必要がありますと考えています。